

大和農法の伝統と変容

——奈良盆地中央部の戦前から戦後にかけて——

はじめに

自著『日本農法史研究―畑と田の再結合のために―』（一九九七 農文協）では、奈良盆地の大和農法に関して、多くの史料にもとづき一四世紀頃より二〇世紀前半までの農法の歩みを実証的に明らかにした。

敗戦後の農地改革をはさんで戦前から戦後の農法史に関しては、関西農業史研究会で一九九一年三月に「大和農法の伝統と変容―戦前から戦後にかけて―」、一九九七年七月に「大和農法の変容と再建―現代日本農法史に向けて―」で報告した。それらの一部は、「農業における作りまわし」（『科学』第七二巻一号 二〇〇二 岩波書店）として紹介したが、詳細は論文にまともていなかった。

本稿では、それらに依拠しながら、大和農法の伝統的な作りまわしがどのように変容していくか、そして在地での農事

改良の模索が現場の農民たちによってどのようにすすめられてきたかを、史料と聞き取りに基づいて実証的に明らかにする。

第一章 作りまわしの概観

統計資料と各種調査から

最初に奈良県全体での主要作物の作付面積に関して明治一五（一八八二）年より昭和五〇（一九七五）年頃までの推移を紹介する。¹⁾図1の夏作物に関して、稲は大正期までは約三万haであった。そして稲作の反収が全国一位になる明治二七（一八九四）年から大正二三（一九二四）年まで、「奈良段階」となっていく。大正期より田畑輪換でスイカが作付けされるようになり、徐々に減少し昭和三〇年頃より急減していく。昭和五〇年頃には約一万五千haと半減している。減反が政策的に進められる昭和四五（一九七〇）年以前から、稲作は減

図2 冬作物（裏作）の動き

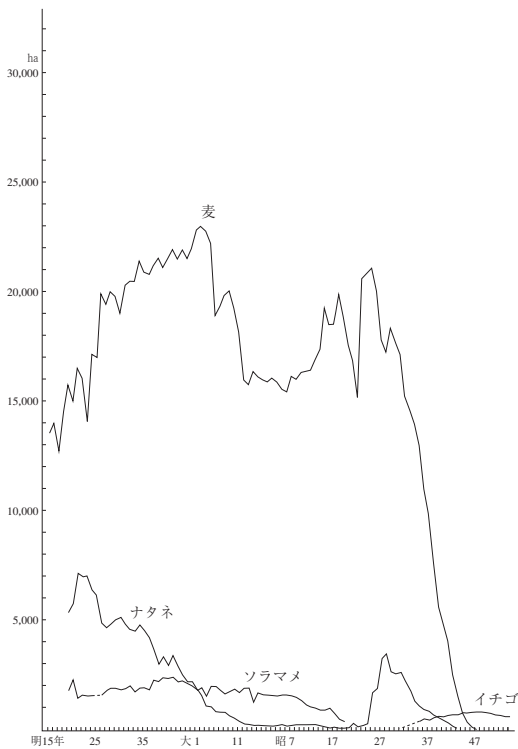
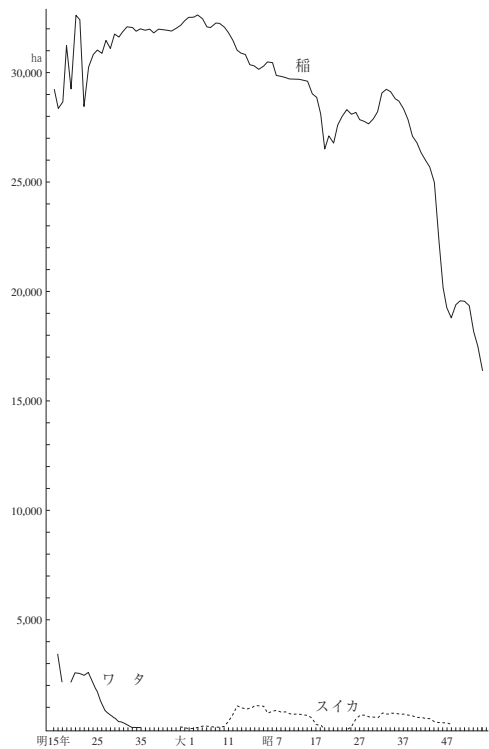


図1 夏作物の動き



(注)『奈良県における農畜産物の作付面積・生産量の推移』1, 2頁より

少していた。

江戸時代以来作られ続けたワタは、明治三五（一九〇二）年頃には姿を消す。スイカは昭和戦前期に千haほどピークとなり、昭和五〇年頃になくなる。

一方、図2の冬作物だが、明治一五年からナタネの衰退に伴い、かわりに麦が増加していく。大正期からの夏作のスイカの導入に伴い、麦は再び衰退していくが、戦中から戦後にかけて一時的に復活し、昭和三〇年前より急減する。

冬作物でソラマメは、一四世紀頃より一貫して作り続けられ、明治一五年以降も一五〇〇から二五〇〇haくらいの作付けが行われていた。スイカの田畑輪換が盛んに行われた昭和期から徐々に減少し、昭和四〇年代には姿を消す。昭和一二年の調査によれば、ソラマメは奈良県下で、明治三〇年頃には一五〇〇町で以後増加し、明治四一年に二一五〇町で最高となり、以後漸減して大正期には一四〇〇町、昭和初期には一三五〇町で維持している。農家一戸当たり平均一反歩の作付けをしており、スイカー大根―ソラマメの作りまわしで五年輪作で行われていた。大和農法の作りまわしにおいて、ソラマメは貴重な役割を果たしていたが、昭和四〇年代にはその役割を終えていった。

昭和一一（一九三六）年の調査では、中和平坦では、早稲六％、中稲一一％、晩稲が八三％と晩稲優勢となっ

表2 秦之庄と保津の農家の作りまわし

地号 耕番	昭 25		昭 26		昭 27		昭 28		昭 29		昭 30		昭 31		昭 32				
	表作	裏作	表作	裏作	表作	裏作	表作	裏作	表作	裏作	表作	裏作	表作	裏作	表作	裏作			
秦之庄	1	西瓜	小麦	稲	裸麦	稲	裸麦	稲	裸麦	稲	ほ草	稲	小麦	西瓜	ほ草	稲	裸麦		
	2	稲	小麦	西瓜	小麦	稲	裸麦	稲	裸麦	稲	ほ草	稲	裸麦	稲	ほ草	稲	裸麦		
	3	トマト	ほ草	稲	小麦	西瓜	小麦	稲	裸麦	稲	裸麦	胡瓜	晩稲	ほ草	稲	小麦	西瓜	白菜	
	4	稲	裸麦	トマト	裸麦	トマト	裸麦	稲	裸麦	稲	小麦	西瓜	小麦	稲	裸麦	稲	裸麦	裸麦	
	5	稲	裸麦	トマト	裸麦	稲	小麦	稲	ほ草	トマト	裸麦	西瓜	晩稲	稲	ほ草	胡瓜	晩稲	裸麦	
	6	稲	裸麦	稲	裸麦	稲	ほ草	稲	裸麦	稲	ほ草	稲	裸麦	稲	ほ草	稲	裸麦	ほ草	
	7	稲	裸麦	稲	ほ草	稲	裸麦	稲	裸麦	稲	裸麦	稲	ほ草	稲	裸麦	稲	裸麦	ほ草	
	8	苗床	野菜	苗床	野菜	苗床	野菜	苗床	野菜	苗床	野菜	苗床	野菜	苗床	野菜	苗床	野菜	苗床	野菜
	9	桃	大根	桃	大根	桃	大根	桃	野菜	桃	野菜	桃	カチャ	桃	野菜	桃	野菜	桃	野菜
保津	1	ま瓜	晩稲	稲	小麦	稲	小麦	稲	裸麦	稲	小麦	稲	裸麦	稲	裸麦	稲	小麦		
	2	稲	小麦	ま瓜	晩稲	稲	裸麦	稲	裸麦	稲	ほ草	ま瓜	晩稲	稲	裸麦	稲	裸麦		
	3	稲	裸麦	ま瓜	晩稲	稲	裸麦	稲	裸麦	稲	裸麦	ま瓜	晩稲	稲	裸麦	稲	小麦		
	4	稲	裸麦	稲	裸麦	ま瓜	晩稲	小麦	稲	裸麦	稲	小麦	稲	裸麦	ま瓜	晩稲	稲	裸麦	
	5	稲	小麦	稲	裸麦	稲	裸麦	ま瓜	晩稲	稲	裸麦	稲	小麦	稲	小麦	西瓜	晩稲	裸麦	
	6	稲	裸麦	稲	裸麦	稲	裸麦	ま瓜	晩稲	稲	裸麦	稲	裸麦	稲	裸麦	ま瓜	晩稲	小麦	
	7	稲	裸麦	稲	小麦	稲	小麦	稲	小麦	稲	小麦	稲	小麦	稲	小麦	稲	小麦	小麦	
	8	稲	裸麦	稲	裸麦	稲	裸麦	稲	裸麦	稲	裸麦	稲	裸麦	稲	裸麦	稲	裸麦	稲	裸麦

(注) 「晩稲」は晩植水稻, 「ほ草」はほうれん草, 「ま瓜」はまくわ瓜をいう。

(注) 『田畑輪換の経営構造』148頁より, 筆者が修正

ており、品種としては改良旭が六二%を占めていた。裏作の二毛作は八〇%の作付で、裸麦が五二%、小麦二九%、ソラマメが九%、紫雲英が四%、その他となっている。昭和一二年の調査では、スイカは四、五年の輪作で行われ、後作には白菜、大根、そのほか秋野菜、そしてソラマメなどが作られていた。

自著『日本農法史研究』では、磯城郡多村秦庄(現田原本町)の秦英雄家の昭和三(一九二八)〜九年の作りまわしを紹介したが、さらに帝国農会の調査により、大正一三(一九二四)年から昭和八(一九三三)年までの個別農家の作りまわしを紹介しておこう。表1の高市郡真菅村地黄(現檀原市)の森田熊太郎家では、二毛作田のみで平均一町二反七畝半の作付をしており、スイカは平均一反、ソラマメは平均約九畝半となっている。緑肥にするカラスノエンドウ(ザイトウイツケン)は大正一三年から昭和四年まで、平均二反八畝半ほど作られたが、実験的なものだった。稲とスイカの田畑輪換が行われていることがわかる。田畑輪換とは、本来表作に水田として稲を作付するかわりに、畑として利用することをいう。後作には、ほうれん草、白菜、体菜など多彩な野菜が作られていた。

田原本町法貴寺の萩原善太郎は、西瓜の採種家として有名で、民間初のF1種「富研号」を生み出し、「萩原農場」として西瓜の品種改良と普及に努めた。聞き取りでも善太郎さ

んにはお世話になった。萩原農場は農家にとって新たな情報源で新技術や新品種などを知り、肥料なども購入していたということであった。⁷⁾

次に戦後の作りまわしの様子を概観してみよう。奈良盆地の稲とスイカの田畑輪換は、当時において今後の日本農業の方向性として水田輪換が望ましいとされたこともあり、多くの調査が行われた。⁸⁾ まず、表2で昭和二五(一九五〇)〜三年の磯城郡田原本町の農家の例を紹介しよう。⁹⁾ 秦之庄の農家は一町六反の作付で六年に一回のスイカ、トマト・胡瓜―晩植水稻のカラケ作を行なっている。桃のぐる作が残っており、一枚の田は野菜の苗床として連作している。保津の農家は九反六畝の作付で四年に一回のマクワウリ―晩植水稻の田畑輪換を行なっていた。ソラマメは作付されていない。両村とも村全体で集团的に田畑輪換を行なっていた。

同じ田原本町の八田では、昭和三四年の資料から、¹⁰⁾ スイカのほかに表作ではキュウリ、ゴボウ、カボチャ、ダイズがあり、二月から八月にトマトが入っている。裏作ではホーレンソウ、キャベツ、白菜、菜類があり、多彩な作りまわしが試みられていたことがわかる。京都大学の西村博行の調査によると、¹¹⁾ 昭和二九(一九五四)〜三一年の中和平坦の二〇村ほどのスイカの前後作をみると、前作は裸麦が多く、スイカと同じ時期にはサトイモ、ダイズ、ナス、そしてトマトが入っている。後作は白菜、ホウレンソウ、そしてほとんどで裸麦である。一村だけソラマメが記されている。

個別農家の史料から

以上は統計書と各種調査からまとめたものであるが、次に個別農家の史料から以上の推移を確認してみよう。現在の磯城郡田原本町法貴寺の前西家は、戦後からずっと毎日の農業や家・村での出来事を記録していた。作付面積は約九反である。毎年表作・裏作を小字の田一枚ごとにまとめたものが表3である。¹²⁾ 昭和二三(一九四八)年から五六(一九八一)年まで連続して三四年間にわたってわかる。このたった一枚の表に、農家の生産と生活、そして意欲までが表現されているのである。

米と麦の強権的供出体制が昭和二一年頃まで続き、自由な作付は許されなかった。そのため昭和二七年までは「稲」と書かれるにすぎなかった。昭和二八(一九五三)年から稲の品種名が書かれるようになったことから、農家の稲栽培、増産への意欲を窺い知ることができるのである。稲の品種をアケボノ、東海旭、新金南風などと次々と変えているのも、より多収の品種を求めてのことだった。

スイカが表作で毎年どこかの田で畑(カラケという)として作られている。これは、戦前から行われていた晩稲とスイカの田畑輪換が、戦後も続いていることを示している。スイカがなくなるのは、昭和四〇年代半ばである。田畑輪換は、江戸時代の初めから形を変えながら四百年間もの間続けられており、奈良盆地の伝統的な作りまわしであった。

その場合、大字内の小字全体をブロック化して畑にするこ

前西家の作りまわし

32		33		34		35		36		37		38		39 (1964)	
裏	表	裏	表	裏	表	裏	表	裏	表	裏	表	裏	表	裏	表
小麦	稲	キクナ 採種	東海 旭	小麦	旭モ チ	キクナ 採種	東海 旭	小麦	モチ	小麦	東海 旭	小麦	東海 旭	小麦	東海 旭
トマト	里芋	蚕豆・葱 白菜	アケ ボノ	小麦	東海 旭	小麦	東海 旭	小麦	モチ	小麦	東海 旭	小麦	東海 旭	小麦	東海 旭
裸麦	胡瓜	小麦移植	新金 南風	6畝 西瓜	アケ ボノ	胡瓜	アケ ボノ	小麦	東海 旭	小麦	東海 旭	小麦	東海 旭	小麦	東海 旭
小麦	アケボノ	小麦	アケ ボノ	胡瓜	黄金 千本	小麦	新金	小麦	東海 旭	小麦	東海 旭	小麦	東海 旭	小麦	東海 旭
春白菜	ミホ ニシキ	裸麦 胡瓜	旭モ チ	小麦	アケ ボノ	胡瓜	アケ ボノ	小麦	東海 旭	ホウレ ン草	東海 旭	小麦	東海 旭	小麦	東海 旭
裸麦	西瓜・ 白菜	小麦	新金 南風	裸麦 甜瓜	東海 旭	小麦	東海 旭	胡瓜	新金	金発	小麦	旭モ チ	裸麦	西瓜、 ホウ レン 草	新金 採種
小麦	アケボノ	西瓜替り、 三田	西瓜・ 白菜	馬鈴薯	東海 旭	馬鈴薯	東海 旭	西瓜	ホウ レン 草	金発	苗代	東海 旭	胡瓜	新金	新金 採種
甜瓜	ミホ ニシキ	小麦・牛蒡 玉葱	アケ ボノ	小麦	東海 旭	7畝 西瓜	5畝 白菜 コケタ で糯	小麦	東海 旭	胡瓜	東海 旭	牛蒡	東海 旭	甘藍、 ホウ レン 草	新金 採種
小麦	アケボノ	小麦	アケ ボノ	小麦	東海 旭	小麦	東海 旭	小麦	東海 旭	春白菜	金発	東海 旭	小麦	新金	新金
											金発	西瓜	ホウ レン 草	小麦 甘藍	新金
											金発	胡瓜一 部 ハウス	東海 旭	茄子・ 甘藍 牛蒡	新金

47		48		49		50		51		52		53		54		55		56 (1981)	
裏	表	裏	表	裏	表	裏	表	裏	表	裏	表	裏	表	裏	表	裏	表	裏	表
モチ	稲	稲	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ
稲	稲	稲	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ
稲	稲	稲	胡瓜 秋茄子	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ
稲	胡瓜	苺	苺 フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ
稲	モチ	稲	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	モチ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ
トマト	稲	モチ	アキツ ホ	部々上 トマト	アキツ ホ	部々上 トマト	アキツ ホ	部々上 トマト	アキツ ホ	部々上 トマト	苺 秋茄子 トマト	ホウレ ン草 採種、 フヨウ	苺、 フヨウ	苺、 フヨウ	半促苺 トマト 促苺	促苺、 半 促 ト マ ト	促苺、 半 促 ト マ ト	促苺、 半 促 ト マ ト	促苺、 半 促 ト マ ト
西瓜代り 前川の 大塚	稲	稲	フヨウ	アキツ ホ	フヨウ	アキツ ホ	フヨウ	アキツ ホ	フヨウ	アキツ ホ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ
稲	稲	稲	フヨウ	アキツ ホ	フヨウ	アキツ ホ	フヨウ	アキツ ホ	フヨウ	アキツ ホ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ
稲	稲	稲	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ
稲	稲	稲	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ
稲	上トマト 下胡瓜	稲	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	胡瓜 トマト	苺	苺	苺	トマト 苗	トマト 苗	トマト 苗	トマト 苗	トマト 苗
稲	稲	モチ	フヨウ	胡瓜	フヨウ	胡瓜	フヨウ	胡瓜	フヨウ	胡瓜	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ
稲	稲	稲	トマト 苺	胡瓜 苗	フヨウ	胡瓜 苗	フヨウ	胡瓜 苗	フヨウ	胡瓜 苗	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ	フヨウ

とが多かった。村の年初の寄り合いなどで、どこを畑地化するのか決めた。そのため、村人どうしで貸し借りすることもあった。小宇東田や小宇浦田などで「代り」と書かれているのがそうである。つまり、作りまわしは村の間もお互いにまわしていく「世まわし」であったのだ。

もう一つ特徴的なことがある。昭和四〇（一九六五）年の裏作を最後に蚕豆が消えてしまう。多くはないが、それまではどこかの田で作られていた。古くは救荒用としてなくってはならないものであり、また空中窒素を固定化するマメ科作物なので地力維持の機能を果たしてきた。実はこの蚕豆、「大和豆」、「大和の青空」などと呼ばれるくらい江戸時代の初めから営々と四百年間にわたって作り続けられ

表3 法貴寺・

小字(反-畝)	昭和23 裏	24 表	裏	25 表	裏	26 表	裏	27 表	裏	28 表	裏	29 表	裏	30 表	裏	31 表	裏		
柳田(0-7)	小麦	稲	小麦	稲	小麦	稲	小麦	稲	馬鈴薯	稲	菜種	稲	小麦	稲	小麦	稲	小麦		
丸ノ坪(1-2)	小麦	稲	小麦	稲	小麦	稲	小麦	稲	小麦	稲	裸麦	50号	小麦	50号	小麦	50号	トマト 春白菜	アケボ ノ	
東田(1-2)	小麦	稲	小麦	稲	小麦	稲	小麦	稲	小麦	稲	谷田七ノ坪 と代り甜瓜	十石	キクナ 採種	50号	上田五反田と 代り甜瓜	アケ ボノ	裸麦	ミホニ シキ	
広長(2-1)	小麦	稲	小麦	稲	小麦	稲	小麦	稲	小麦	稲	小麦	馬鈴薯	十石	小麦	50号	小麦	アケ ボノ	小麦	アケボ ノ
五反田(0-8)	小麦	稲	小麦	稲	小麦	稲	小麦	稲	小麦	稲	小麦	蚕豆・ 甜瓜	十石	裸麦・ 胡瓜	アケ ボノ	小麦	アケ ボノ	小麦	アケボ ノ
部々(1-0)									稲	麦・ 胡瓜	稲	小麦・ 里芋・ トマト	十石	トマト・ 甘藍	アケ ボノ	胡瓜・ 春白菜	十石	甜瓜	アケボ ノ
浦田(0-7)	小麦	稲	小麦	稲	麦	西瓜	小麦	稲	麦	稲	麦・ 胡瓜	十石	小麦	50号	前川田口部代り 西瓜・ 白菜		西瓜	白菜	
イサゴ(1-2)	小麦	稲	小麦	稲		稲	小麦	稲	小麦	稲	裸麦・ 西瓜・ 白菜	十石	甘藍	50号	小麦		アケ ボノ	胡瓜	アケボ ノ
四条田(1-1)	小麦	稲	小麦	稲	麦	稲	麦	稲	麦・ 西瓜	白菜	裸麦	50号	ホウレン 草採種	62号	小麦		アケ ボノ	小麦	アケボ ノ
部々(1-0-08)																			
宮の角(2-3)																			

	昭和40 裏	表	41 裏	表	42 裏	表	43 裏	表	44 裏	表	45 裏	表	46 裏	表
柳田		新金		旭モチ	稲		稲		モチ	稲		稲		稲
丸ノ坪		新金		新金	稲		稲		モチ	稲		モチ		モチ
東田		新金	小麦	新金	稲		稲		モチ	稲		モチ		モチ
広長	小麦	新金		新金	稲		稲		モチ	稲		モチ		モチ
五反田	小麦	旭糯		新金	稲		稲		モチ	稲		モチ		モチ
部々	春大根	坂本(溝田)と 代る。新金	胡瓜	新金	稲		西瓜採種 ホウレン草		モチ	稲		モチ		モチ
浦田	苗代	新金	苗代	新金	稲		稲		モチ	稲		モチ		モチ
イサゴ	裸麦	西瓜	ホウレン草 春大根	秋晴	西瓜替地 坂本ヒマン田		稲		モチ	稲		モチ		モチ
四条田		新金		新金	稲		稲		モチ	稲		モチ		モチ
部々	蚕豆、ホウ レン草採種	秋晴	茄子	新金	稲		モチ		モチ	稲		モチ		モチ
宮の角	胡瓜・茄子	新金 茄子・野菜	裸麦	西瓜	稲		モチ		モチ	稲		モチ		モチ
大塚(1-0-03)				稲	モチ		稲	茄子	モチ	稲		モチ		モチ
内田(1-1)				稲・ 茄子	モチ	坂本大塚と代 り、(胡瓜)稲	稲		モチ	稲		モチ		モチ

(注) 田原本町法貴寺・前西英雄家文書「農家日記」などより、筆者が作成

ていた。大字横田では、「五月の川浚いの時は、田んぼのソラマメは食い放題」という慣行があったそうである。⁽¹³⁾昭和四二(一九六七)年から再び稲品種が書かれなくなり、五〇年以降フヨウ種のみとなる。昭和四五年からの減反で、農家の米への熱意は失せたに違いない。それでは、昭和四〇年代から農業生産の中心は何に変わったのだろうか。昭和三八(一九六三)年に小字宮の角の田の一部にハウスが入り、胡瓜や茄子が栽培されはじめている。そして小字宮の角と小字部々が固定式のハウスとなつて、イチゴ中心の経営に変わる。裏作麦は昭和四二(一九六七)年から作られなくなる。昭和四〇年代から作りまわしがなくなり、田は稲単作となり、固定式の施設園芸へと変わったの

A家の農業生産

主要稲品種	備考		小麦 トマト キウリ 苺	備考	米反収 (石)	備考
晩生籾 矢田神力 タ毛神力 朝日穂		昭和38	○ ○ ○	蚕豆なくなる	3.76	
○ ○ 改良朝日	米販売 旭穂	39	○ ○ ○ ○	苺はじまる	3.26	
籾 旭早稲 ○ 旭穂		40	○ ○ ○		3.05	
旭籾 ○ 矢田神力 ○		41	麦 なく なる ○ ○ ○	苺にビニール入る	3.6	
○ ○ 名古屋旭 ○		42	○ ○ ○		3.90	耕耘機購入, 夏作と表記
○ ○ ○ ○	青物, とまと, 桃(小林)	43	○ ○ ○	ハウス, トンネル	3.53	鶏ニューカッスル病でやめる
○ ○ ○ ○	かぶら, ホーレン草, 広島菜	44	○ ○ ○		3.3	
○ ○ ○ ○	農林2号	45	○ ○ ○	苺	3.5	減反
窒素, 過磷酸, 西瓜肥料, 配合肥料, 木灰		46	○ ○ ○		2.93	夏作, 稲作の表記区別なくなる
		47	○ ○ ○		3.4	小型耕耘機購入
		48	○ ○		3.67	稲刈機, 糶摺機 秋晴 フヨウ
		49	○ ○		3.87	乾燥機購入 ○ ○
		50	○ ○		3.75	田植機購入 ○ ○
旭籾 早稲 千本旭 旭	稲作と表記	51	○ ○		3.6	○ ○
以下品種記載ナシ		52	○ ○		4.0	コンバイン購入 ○ ○
	米供出	53	○ ○		4.25	○ ○
麦作と表記	西瓜跡, 甘藍・馬鈴薯	54	○ ○		3.6	○ ○
	○ ○	55	○ ○		3.7	運搬用 テラー購入 アキツボ ○
	麦, 小麦の供出	56	○ ○		3.63	○ ○
	○	57	○	苺半促成	3.8	トラクター購入 ○ ○
	○ ○	58			3.1	○ ○
	○ ○	59			3.73	○ ○
	○	60			3.0	○ ○
	麦・小麦の自由販売	61			3.6	田植機購入 ○ ○
	鶏はじめる	62			3.8	○ ○
		63			3.77	コンバイン購入
		平成1		苺宝交		○ アスカ ミノリ
		2			3.6	○
	耕耘機共同利用	3		苺トヨノカ		
		(1991)				
	トマト					
	トマト・キウリの共同出荷					

表4 中城・

	裸 麦	小 麦	菜 種	豌豆	蚕 豆	米反収 (石)	主要稲品種	備 考		米反収 (石)
明治28	○	○	○	○	●	2.27	須久美糯 山田穂 毛糯 国早糯	五日作, 本作と表記	昭和4	
29	○	○	○	○	●	2.29	○ 石塚穂 ○ ○		5	3.39
30	○	○	○	○	●	1.8	○ ○ 岡山穂		6	
31	○	○	○	○	●	2.85	八条早糯 ○ 真力穂 ○		7	3.05
32	○	○	○	○	●	2.57	○ ○ ○ 赤糯	白真瓜, 銀真瓜 畑-綿, 茄子, 西瓜, 胡瓜	8	3.44
33	○	○	○	○	●		○ ○ ○ ○	油粕, 真粉粕, 種粕	9	2.72
34	○	○	○	○	●	2.8	○ ○ 山城穂		10	牛替, 福住, 都介に預け
35	○	○	○	○	●	2.12	○ 中稲糯 中稲真力 ○		11	3.03
36	○	○	○	○		2.4	○ ○ ○ ○		12	肥料-大豆粕, 棉実粕, 硫酸, 石灰
37						2.82	真力早糯 晩稲真力 ○ ○		13	
38							○ ○ ○ ○		14	
39			記述ナシ				○ ○ ○		15	
40						2.80	○ ○ ○ 交神力	真力→神力	16	
41						3.0	○ ○ 高知神力 ○		17	3.38
42							二本早糯 ○ ○ ○	ブドウ, 梨 日本大西瓜, アイスクリューム	18	3.20
43	○	○	○	○	●	2.75	○ ○ ○	茄子, 胡瓜, 三度豆, 白瓜	19	3.0
44						2.96	○ ○ ○ 役場穂	真瓜, 南瓜, 大角豆, 芋など	20	2.97
大正1		大 麦				2.65	福早糯 ○ 三輪穂 ○		21	3.05
2	○	○	○	○	●		○ 味間穂 ○		22	3.6
3	○	○	○	○	●		○ ○ ○ 金摺		23	3.3
4							○ ○ ○ ○		24	3.1
5							沢田早糯 ○ 播州神力 ○	青物, 梨(独逸, 長十郎)	25	3.22
6							○ ○ ○ ○		26	3.4
7							○ ○ ○ 朝日穂		27	3.52
8							○ ○ ○ ○		28	3.1
9							○ ○ ○ ○		29	3.28
10							○ 生駒神力 ○	青物, とからし	30	3.91
11							稗田早糯 ○ ○ ○	西瓜の大阪天満行	31	3.47
12							○ 矢田神力 ○ 晩生糯		32	3.5
13							○ ○ ○ ○	西瓜の京都行	33	3.46
14							○ ○ ○ ○		34	
昭和1							○ ○ ○ ○	牛あり, 上之郷預け	35	3.63
2							○ 夕毛神力 ○	青物, ぬきな, 葱, 大根葉	36	2.93
3							○ ○ 朝日穂		37	3.65

(1928)

(1962)

(注) 大和郡山市中城町・A家文書「萬野作覚帳」「生産高帳」より, 筆者が作成
●, ○は, 作物や品種が継続していることを示す。

である。

さらに別の農家記録を紹介して、先ほどの前西家の作りまわしの変化を確かめておこう。奈良盆地中央部の大和郡山市中城町のA家では、明治二八（一八九五）年から平成三（一九九一）年現在まで百年近く代々農業経営の記録を書き続けている⁽¹⁴⁾。残念ながら一筆ごとの作りまわしはわからないが、農業生産の変化の様子が実によくわかる。作付面積は当初は約六反であったが、次第に増大しその後は一町前後であった。

表4によれば、明治中期から戦後しばらくまで、伝統的な作りまわしが続けられていた。明治二八（一八九五）年には江戸時代から田畑輪換で作られてきた表作のワタはなくなっていた。稲作に力が注がれ、明治三十一年に短程で穂数型の「真力Ⅱ神力」が登場する。明治後期から大正期にかけては多収の神力時代と言ってもよく、早稲・中稲・晩稲の神力、高知・播州・矢田・生駒と他府県や県内から伝えられた神力の有力品種が作られていく。明治二七（一八九四）年から大正一三年まで奈良県の米反収は全国一位となり、「奈良段階」と呼ばれている。

しかし、米だけでは食べていけないので、現金収入を求めて、わずかな畑で野菜作りを試みている。明治四二（一九〇九）年にはアイスクリームと呼ばれるスイカや、胡瓜・白瓜・真瓜などの瓜類、三度豆・大角豆などの豆類、そして茄子、芋など数多くの野菜を作ってみている。

また、田では一部を盛り上げた「ぐろ」でブドウや梨、桃の果樹栽培をやっている。大正五年には独逸（ドイツ）と長十郎の品種名が、桃では昭和九年に白桃と小林という品種名が記されている。

青物やスイカの売り上げが詳しく書き始められるのは、大正一〇（一九二一）年からである。米から重点が移っていった。近くの奈良、郡山、櫛本だけでなく、大正一一年には大阪の天満と名古屋へ、一三年には京都へ出荷している。

昭和九（一九三四）年に初めて「とまと」が登場する。そして、かぶら、ホーレン草、広島菜などが出てきて、多彩な野菜づくりを行っている。稲は大正七年に朝日Ⅱ旭穂が初めて登場し、以後次第に神力系統品種から脱粒性は強いが品質が良く高く売れる改良朝日、旭糶、名古屋旭、千本旭など旭系統品種へと変わっていく。

昭和一九（一九四四）年から米の供出がはじまり、麦の供出は昭和二二年からである。昭和二七年から麦の自由販売が出来るようになり、昭和三三（一九五八）年に養鶏を始めて現金収入の途を多角的に開いていく。しかし、昭和四三年にニューカッスル病が流行し止めている。裏作では昭和三八年から蚕豆がなくなり、四一年に麦が消えている。昭和四五（一九七〇）年に米の減反が始まっている。

昭和三五（一九六〇）年からトマトが入り、キュウリを組み合わせた作型となった。トマトは戦前に作ってみた経験が生きていた。そして昭和三七年からトマトとキュウリの共同

出荷を行っている。三九年からはイチゴを加えている。四一年に初めて小型のビニールハウスを入れ、四三年に養鶏をやめたのを機にトンネル型ハウスを入れて、本格的なイチゴと秋トマトの作型の施設園芸の農業経営へと転換していった。こうしてみると同家の昭和四〇年前後での作りまわしの消滅は、先の前西家とほとんど一緒であったことがわかる。

最後に大和郡山市新庄町の森田家のメモから紹介する¹⁵⁾。新庄町では明治以降水田を築き上げて「ぐる」で梨を栽培した。品種は長十郎梨で大阪天満市場に出荷し、「大和梨」としてブランド化していた。しかし大正五、六年頃より果実に虫が入り品質が低下し、新興産地の静岡梨に負けていく。家用を除き消滅した。代わりに新庄町は砂質土壌で排水も良かったので、家用のワタ作、裏作として家用の食用油と燈明用のナタネが栽培された。

スイカ栽培は大正初期から黒皮スイカで始まり、続いて白皮スイカ（アイスクリン）に変わっていった。大正一四（一九二五）年からアイスクリンと甘露スイカを掛け合わせた縞皮の「新大和西瓜」が主力となる。自然発芽させ露地栽培や硫酸紙キャップ栽培で作られ、大阪、京都、尼崎その他に出荷された。新庄町のスイカは県内でもトップの評価を受けていた。昭和三年頃より、裏作やスイカ跡にケシ栽培が始まった。ケシは栽培も手数がかかるが、収益が多いので、採取に四、五人も雇って昭和一五年くらいまで続けた。

しかし、スイカもケシも戦争による米麦などの増産命令のため中止となり、戦後は食糧難で米・麦・小麦、サツマイモ、ジャガイモ、豆類の供出が続いた。

敗戦後にトマト栽培が復活し、板囲いで油障子を張って育苗し、五月上旬に露地に定植した。昭和三〇年頃よりは、三月中旬に定植する半促成のトンネル栽培に変わっていった。

品種は「福寿二号トマト」であった。この頃までは食糧増産のため、トマト収穫後の七月二〇日頃より晩植の水稻をした。昭和四五年よりトマトのハウス栽培に完全に移行した。品種は「米寿」であり、平成二年より「桃太郎」に変わった。

イチゴは昭和三〇年頃より露地で栽培を始め、品種は「里イチゴ」であった。トマト同様、収穫後は晩植の水稻をした。昭和四〇年頃よりハウス栽培に移行していき、蜜蜂による受粉を行った。昭和六〇年頃の品種は「宝交」で、六三年から「豊の香」に変わった。

以上、各種資料や個別農家の史料をまとめると、一四・五世紀からのソラマメを軸とした大和農法の伝統的な作りまわしは、昭和四〇年代に、イチゴやトマトの導入による施設園芸の展開により消滅したといえよう。

第二章 農具などの動き

統計資料と各種調査から

次に農具などの変化を見ておこう。奈良県統計書によれば、¹⁶⁾

牛耕率は明治四四（一九一一）年で全県で三八・九％である。南葛城郡が八六・三％、生駒郡が七一・四％に対し、山辺郡が二・三％、磯城郡が一・五％と地域差が大きかった。大正九年においても状況は変わらず、全県で四二・八％、南葛城郡が八五・三％に対し、磯城郡は一・九％にとどまっていた。

しかし、昭和一一（一九三六）年になると、北和平坦で春の牛耕率は七八％、中和平坦でも急激に増えて約七〇％にまでなっていた。耕深はともに四〇五寸であった。残りは両地域とも備中鉄によっていた。¹⁷昭和一二年の秋の耕耘は平坦部では約七〇％であった。¹⁸昭和一六年では、県全体で七六％、南葛城郡が九〇％、生駒郡が七五％、山辺郡が七〇％、磯城郡が六五％となっていた。¹⁹こうした全県的な墾耕の普及にともない、奈良県農会は昭和一一年三月に、各郡市三名ずつを選んで競争会を行っている。²⁰

また、昭和一六（一九四二）年の帝国農会の綿谷越夫の調査ノートによれば、²¹山辺郡二階堂村小田中（現天理市）の自作農家では、大正二〇（一九二二）年よりそれまでの長床犁に変えて、高北式と類似した西風式短床犁を使い始め、四寸の深耕が可能となったとある。磯城郡大福村東新堂（現桜井市）の小作農家は、大正八、九年頃より高北式一六号を使い始め、四寸の耕深であったという。これらの近代短床犁を当時の農家は「ハイカラ」と呼んで珍重し、他にも「改良カラスキ」「高北」などと呼んでいた。²²以上のように、奈良盆地

の中央部では、大正後期より牛耕が急速に進んだことがわかる。

次に村内での墾耕に必要な牛の所有状況を紹介しておこう。昭和一二（一九三七）年の高市郡真菅村地黄では、全四〇戸で牛は五戸に五頭いた。三戸の地主兼自作で一戸、三戸の自作で一戸、二戸の地主兼自作で一戸であり、その他の一〇戸の自小作と二二戸の小作では所有していない。²³昭和一四年の磯城郡川東村法貴寺では、全八九戸のうち一九・半頭所有していた。地主自作は一〇戸中の四戸、自作の一六戸中で二戸が各一頭、一戸が自小作と共有。自小作二七戸中の七戸が各一頭、一戸が自作と共有。小作三六戸中では五戸が各一頭となっていた。²⁴盆地平坦部では、春と秋の使役時以外は、山間部に預け牛するのが一般的であった。

戦前において動力耕耘機は入っておらず、昭和二七（一九五二）年で全県六九八三戸中、五一台で個人所有が四〇台、共同所有が一一台であった。クランク型が一五台、ロータリー型が一五台、その他が二一台である。²⁵村別の状況を見ると昭和三四（一九五九）年で磯城郡川東村八田で全九〇戸で、七戸で一台の共同所有が二グループあり、高市郡耳成村葛本（現橿原市）で全三〇戸で、一四戸で一台、一一戸で一台の共同所有であった。²⁶

次いで細かくは紹介しないが、脱穀は千歯扱から大正末期から昭和に入って足踏の回転式脱穀機に替わる。戦後には動

力式脱穀機が共同所有から個人所有へと普及していく。初摺りは土臼から大正期頃より人力初摺機に替わり、戦前には動力初摺機が入っている。

田畑への灌漑については、戦前からヒューガルポンプなどが共同使用で入りですが、昭和二七（一九五二）年の調査でも、ヒューガルポンプ、バーチカルポンプその他で、全県六九八三戸で、共同が八一〇戸、個人使用が一四九六戸にとどまっていた。²⁷このように農業における機械化は奈良県においては、戦後の昭和三〇年代後半から四〇年代に進んでいたといえよう。

個別農家の史料から

以上の戦前から戦後の農具などの動きを、再び個別農家の史料から確認しておこう。中和平坦部での牛耕の進展を個別農家の史料で確認すると、²⁸田原本町の秦之庄の松井家は、大正一二（一九二三）年に牛一頭とからすきを購入し、同町阿部田の松井家は大正一四年に牛、翌一五年に唐鋤を購入し、同町東但馬の高井家は大正一二年に子牛を購入している。同町宮古の石橋家は昭和七年に牛を共同で使役し、供用代を払っている。

次は大和郡山市新庄町の森田家の場合である。²⁹明治三〇年頃から大正期にかけて、大字内の一町五反ほどの大規模経営では牛で耕起し、六・七反の小規模では備中鍬であった。その他の農具としては、鎌、金鍬、平鍬、鋤、鋤簾（じょれん）、

稲竿、稲足などがあつた。調整用として米麦とも金扱きで穂粒を引き抜き、麦の脱穀は唐竿で打ち叩いて実を取り、米は臼で挽いて粉をはがし実を取っていた。

大正七（一九一八）年頃より麦の調整は手で動かす麦摺機が出現し、大正九年頃より麦のイガ分け用として手廻しの扇風機が登場した。稲の調整は大正一〇年以降足踏み式の脱穀機（白川式・長柄式）が出てきて使い始めた。大正一二、三年頃より治道の組合が運転手付きで発動機で動かす野田式白挽機を貸し出すようになって、大変便利になったとのことであつた。その後、麦・小麦・雑穀の調整機も発動機による動力運転となった。

昭和三〇（一九五五）年頃より二馬力の石油発動機による米麦脱穀機が登場した。米麦用の穀物乾燥機は、練炭で温度を保つ箱型の乾燥機であつた。昭和三五年頃より、牛に変わって田を耕すトラクターが登場する。そして三八年頃より五、六馬力の耕耘機に変わる。昭和四〇年に稲竿に掛けて天日干しするための稲結束機が登場し、四八年頃より刈取と脱穀を同時にしてしまうコンバインが、そして石油による初乾燥機も出てきた。昭和五〇年代には初摺りも優秀な自動式となった。そして昭和六〇年代には手押し式の耕耘機に変わって乗用のトラクターとなった。

先ほどの大和郡山市中城町のA家の表4によれば、戦前から預け牛をしながら飼っていた牛は、昭和三二（一九五七）年から耕耘機の共同使用がはじまり飼われなくなった。昭和

四二（一九六七）年の自家用の耕耘機を購入したのを皮切りに、昭和四七年小型耕耘機、翌年に稲扱機と耨摺機、四八年乾燥機、四九年田植機、昭和五二（一九七七）年コンバイン、五五年テラー、昭和五七年トラクターと、急速に機械化がすすんでいった。まさに中型機械化（二貫）体系の確立であった。³⁰

聞き取りによる機械化の展開

それでは具体的にどのように入っていったのかを、聞き取りから紹介しよう。昭和二七（一九五二）、八年頃に大和郡山市中城のある田にクボタが来て試運転をし、近所から大勢見学に来た。アメリカの輸入機械の広告が朝日新聞に載ったので、静岡まで見学に行ったりもした。昭和三〇年ごろに平端で今度はキセキが試運転をした。こうして購入したが、大字内の篤農家に一畝、新しい耕耘機とそれまでのカラスキとでどう出来が違うか、試験をしてもらった。自分でイチゴの畝づくりをカラスキでした要領で耕耘機でしたが、まわりの村人は「あんなことでイチゴが出来たら、お日様が西から上がるらしい」と笑って、様子見をしていた。³¹ また、別の大字では昭和三五年頃にテイラーを入れて田を耕耘したが、まわりは「あんなもんでひよひよひよひよやったって、お米が出来るか」と冷ややかであったという。³²

ある大字では最初は共同で使用した。昭和三〇年代初めから三五年くらいまで、大字内の専業とか同じ年配、経営規模

が同じとかいう共通点で何軒かで共同購入した。農協から購入するのだが、「耕耘機使い」という運転手というかオペレーターを派遣してくれて使用方法を学んだ。³³ 別の大字では、耕耘機は近所の三軒で共同購入した。トラクターの場合は、大字でクボタのを五台購入し、五、七軒で組を作り、共同で使用したそうだ。³⁴ また別の大字。耕耘機を他の村で使っているのを見て、五軒で島根県のサトウというメーカーから購入して共同使用した。やがて三軒での共同使用となり、やはり便利だということで、個人所有することになっていった。³⁵

このようにして昭和三〇年代、新し物ずきの先駆け層が個人で、また共同で導入して、日和見していた周りの者たちも段々その便利さがわかってくるに従い、徐々に機械化が進んでいったのである。そして次第に個人所有へと変わっていくのである。

作りまわしの消滅は、同時に手まわし、世まわしの衰退でもあった。急速な機械化・化学化・施設化、土地や手間の貸し借りの消滅。そして兼業化の急速な進行。一九六〇年代からの高度経済成長のもとで、伝統的な作りまわしは変容していき、農村もまた急激に変わっていった。

和語の「まわし」で表現されていた伝統的な循環世界を、単に耕地や自然界での物質やエネルギー、生態系のリサイクル世界とだけ皮相的にとらえてはいけない。作りまわし、手まわし、世まわしというように、作物相互の循環、耕地と耕地以外の家畜や入会地などの循環、農家の暮らしと生産と

の循環、それらが村という世間の器の中で循環の輪を作っていたのである。⁽³⁶⁾

第三章 在地での農事改良の動き

ことわざにみる農家の知恵

一九九一年から九三年にかけて、大和郡山市中城町のトマト農家である堀内金義さんと、史料調査とともに農家を回って、当時六〇代、七〇代の多くのお年寄りから昔の話を聞き取りした。最初によく言われていたことわざを紹介しよう。そこには、長年の奈良盆地の農家の知恵がつまっているからである。

一歩先行きや、楽やぞ 人と同じことをしていたのではもうけにならない。いろんなところから情報は入ってくる。今までは全く違った新しいことを試みる場合、情報源としては他村の親戚が多い。新しい種や苗を分けてもらう。新しい肥料や機械など技術を教えてもらう。隣近所は、うまくいくかどうかこっそり観察している。失敗すればそれみたことかと笑いにし、うまくいけば二、三年でたちまち自然と村全体に普及していく。まさに「日和見」である。とくに教えるということも、わざわざ聞くということもない。

こうした先駆け、抜け駆けするチャレンジ精神旺盛な農家は、大峯信仰の影響もあり、「先達（せんだつ）」と呼ばれたりする。裏では鼻が高い「テング」と、陰口を叩かれたりもしている。このようにして在地での農事改良は進んでいくの

である。⁽³⁷⁾

田の足跡にまざる肥料はなし 金のことばかり、楽することばかりを考えていては、年寄りから「スイカはなまくらおこしたらアカン」とガツンとやられる。毎日田んぼや畑を歩き回って、稲やスイカの顔色を見て手入れをまめにしないとけない。「シリヌケ」のような経営感覚0の者、「ドラクラ」のような仕事の整理整頓、段取りのできない者、「ナマクラ」と言われたら最低だ。

奈良盆地では勤勉に働く「熱心」が強調された。「仕事師」、「巧者」、「丁寧者」、「篤農家」が褒め言葉であった。江戸時代の大和の農書「山本家百姓一切有近道」では、根気よく働くことを「上根（じょうこん）」と言って推奨していた。⁽³⁸⁾

一銭を笑う者は、一銭に泣く これはよく聞く言葉である。「梨貧乏」という言葉があり、手間ばかりかかって値段の変動が激しくて、結局は儲けにならないのがぐるで作った梨であった。大和郡山市発志院の越智太兵衛（一八八二―一九六一）は、明治四四（一九一一）年に農村での信用組合を全国で初めて作った人であるが、彼は「一銭貯金」を提唱して、儉約・貯蓄を勧めたのである。⁽³⁹⁾

今日は人の身、明日はわが身 村は一人、一軒で成り立っているのではない。「ムコシタ」を見る、相手の足元を見て弱味につけ込む輩は、村内から遠ざけられていく。畦を削って自分の田んぼをこっそり少しずつ増やしていくようなズルは、必ず見張られている。村には村なりの守るべき道徳があるの

である。それによって村の「和」⇨合わせが保たれるのである。先ほどの江戸時代の農書は、それを「百姓の道」と名づけていた。⁽⁴⁰⁾江戸時代を通じて形成された勤勉・節約・和合の「通俗道徳」は、戦後になっても生き続けていたのである。

スイカから蔬菜などへの模索

こうした話を聞かせてもらった一九九一〜九三年当時六〇代、七〇代のお年寄りが大活躍した四〇、五〇年前に話を戻そう。奈良盆地中央部では農地改革後の熱気の中、昭和二〇・三〇年代に様々な新農法の模索が行われていた。中和平坦の動きを史料と聞き取りにもとづき具体的に紹介しよう。先ほどの表3で紹介した田原本町法貴寺の前西英雄は、一七才の昭和二三（一九四八）年から農家日記をつけ始めていた。昭和二六年には、同じ大字の有名なスイカ採種業者である萩原善太郎ら三人で、和歌山県那賀郡まで農家見学に行き、「ビニールハウス見学」（ビニールハウスのこと）をしている。また同年、大阪の大果蔬菜部の課長を呼んで、法貴寺小学校で「ピーマン講話」を催している。⁽⁴¹⁾石川の藪内源弘も一九才の昭和二三年から、農家日記をつけ始めている。⁽⁴²⁾こうした毎日の農作業を整理して記録していくことが、体験知・伝承知を技術へ高めていくことにつながっていたのである。

こうした個別農家の動きは、大字全体や地域への広がりを見せていく。大和郡山市伊豆七条には県の指導による標準農村青少年研究会として、昭和三〇（一九五五）年に「愛農ク

ラブ」が作られた。⁽⁴³⁾横田の橋下忠一郎の話しによれば、昭和二三、四年頃より大字で農業研究会が行われ始め、黒沢式の並木植えや酵母菌の使用を試している。大本教の「愛農会」や「みずほ会」も大字内で組織された。⁽⁴⁴⁾橋下忠一郎は、昭和二〇年代に米作の篤農家として知られていたが、⁽⁴⁵⁾昭和三九年から平成三年まで、ノートに農作業のことをきめ細かく記していた。⁽⁴⁶⁾

田原本町川東村農協は、「川東村営農相談所」を作り、昭和三三年に『営農』の別冊として「川東配合肥料による稲作増収安定法」を配布して、営農指導を行っていたことがわかる。⁽⁴⁷⁾

大和郡山市では、各大字で昭和二五、二六年頃より主に増産を目的とした若手の農業後継者による4日クラブが結成されていった。昭和二九（一九五四）年の町村合併による大和郡山市の誕生にともない、全市的に4日クラブが組織された。⁽⁴⁸⁾こうして若手の農業後継者たちによって、一九五〇年代以降の農事改良がすすめられていくのである。

大和郡山市でのイチゴ栽培は、大正六、七年頃より美濃庄で始まったといわれており、昭和三〇年代に除草技術、トンネル+マルチ栽培の展開、昭和三八年に「宝交早生」の導入、昭和四〇年代に入ってからハウス栽培、促成・電照・株冷蔵栽培と次々と新しい技術が展開されていった。昭和四五（一九七〇）年からの米の減反に伴う転作奨励、他産地との競争が激化する中で、「常に研究、勉学し、かつ団結しなければ他産

地においこされ、大和西瓜のような状態にならないともかぎらない」との反省と自覚のもと、全市的なイチゴ研究会が昭和四五年に結成された。⁴⁹⁾

こうした動きは全県的に広がり、昭和九(一九三四)年に作られた私立農民道場「豊農塾」は、昭和一三年に県立となりて運営される。昭和二一年に県立修練農場、そして二四年に県立伝習農場として多くの青年たちを教育していくことになる。昭和四六(一九七二)年に現在の奈良県農業大学校となる。⁵⁰⁾ 奈良県農業試験場は、農民向けの講習会を行い、昭和二八年一〇月の農業技術展示会には三日間でなんと一万三千人が訪れている。⁵¹⁾

農事改良の苦勞

辻中平治さんは、昭和二三(一九四八)年より奈良県農業普及員となり、昭和二六年から治道村(現大和郡山市)の農協技術指導員として各大字を巡回して指導に当たったが、その苦勞話を聞き取りした。各大字に「農業研究会」を組織し、夜間に研修会や座談会を開いた。各大字によって村柄、村の性格や雰囲気が違うので、苦勞した。量を多く取ろうとし、テングが多くて統制の取れていない大字、座談会の席上で喧嘩するくらい一匹狼が多い大字、旦那さん気質の多い大字、反対に小作人が多いので、倒れても土を拾うというど根性のある大字などなど、実に難しかった。自信のないことは絶対と言わないようにしておかないと、後で足を掬われて指導

が出来なくなる。農業試験場の試験結果と慣行法を検討しながら、農家の考えていることの一つ上をいくように努力をしていた。各大字にいる篤農家で気の合う農家に一畝だけでも試験してもらい、うまくいくとすんなり広まっていた。

それと広めていくには、農家の奥さんの賛成が絶対に必要だということ。いくら研修で納得してもらっても、奥さんに反対されたらすぐにひっくり返ってしまうので、女性陣の中心人物にはとくに気をつかった。

昭和二五(一九五〇)年に除草剤の24-Dを奨励したが、これはどこでも関心が高く、どこの大字の研修会でも人が入りきれないくらい熱が高かった。二年でまたたく間に普及し、これ以降省力化がすすんだ。同時に共同での耕耘機や脱穀機などの機械化も徐々に進んでいき、農業生産のシステムが変わっていった。ある農家は辻中さんのことを、ものすごく熱心で神様みたいな人だったと回想している。⁵²⁾

しかし、一方では明治以来、「シャツポ虫」というシャツポ(つばのある帽子)をかぶった役人や試験場の者を揶揄する言葉は、戦後になっても生きていた。「シャツポ虫が机上論をふりかざしたって、こっちゃん専門やわい」といった自負があった。普及所の話を聞こうかという雰囲気になつたのは、昭和三〇年頃からイチゴの新技術を教えるようになったからだと言う。⁵⁴⁾ 奈良県の農業というのは全国的にみて「先進的」であり、新品種や新技術も早くから導入してきた。しかもそれらは地べたから起きてくるのであり、行政の指導

は弱く後手後手であった。⁵⁵⁾

また、イチゴに関しても「奈良流」とでもいうべきやり方を模索していた。作付面積を大きくして、できるだけ省力化して、収益を上げる努力をした。そのためには、職人技と冒險心の二つが備わっていないといけない。⁵⁶⁾ 農家が先にやっていく、こうした自負、自信が奈良県の農家の特徴であり、裏返せば行政の指導に従わず、ばらばらでまとまりが悪いのであった。スイカにしろ、イチゴ、トマトにしろ、全国に先駆けて産地化するのだが大産地化はせず、後発の行政や農協主導の新興産地に次々と負けていくのはそのためであった。⁵⁷⁾

もう一つ、辻中さんが言われたことで重要な問題である女性の活躍についても紹介しておく。聞き取りは男性だけでなく、老若男女、女性からも行った。大字横田では、それまで生け花や習字、踊りなどをする婦人会はあったが、昭和三〇年代前半に、治道村で初めて女性だけで「横田農業クラブ」が作られた。最初五名ほどで作られ、月一回くらい集まった。当時の生活改善事業の影響もあった。唐辛子の共同出荷なども行った。とくに昭和三五年くらいから兼業で夫が仕事に出るようになっていき、このクラブから得る農業の情報は参考になった。一緒に泊りがけで旅行に出かけることもあったとこのことである。

大字によって男性と女性の関係は違っていて、大字の集會に女性も出かけると、パラパラと女性も、女性が一切出ない大字と、治道村の中でも大字によって違っていた。⁵⁸⁾ 若手の

「專業農家は、女手がなかったら實際回っていかへん。相談して家族全体で同意を取るようになっていっていると云われていた。⁵⁹⁾

梅の花が上向きに咲けば豊作

昭和三六（一九六一）年、田原本町農業研究会の機関誌『土』の創刊号が出された。⁶⁰⁾ これによれば、昭和三年より西磯城農事改良普及所、町役場、農協と協力しながら農家の研究活動がはじまり、昭和三二年には都村に4日クラブが出来、三五年には園芸品評会、三二年から三五年には米作増産研究会が開かれていたことがわかる。昭和三六年段階で田原本町の農業研究会には、三百四十二名もの農家が参加している。

研究報告には、近郊農業に生きる我等の4日クラブ（一九五五年設立）、稲作増産共進会特賞を受賞した二軒の農家の稲作技術、園芸品評会で特賞を受賞した農家の西瓜栽培の要点、西瓜の鉢栽培の実験、奈良県農村青少年実績発表大会での報告（西瓜跡の秋茄子の接木栽培、胡瓜を取り入れた田畑輪換栽培）が掲載されている。当時の農業生産に対する関心、農事改良への熱意が如実にあらわれている。

田原本町農業研究会の『土』から、増産共進会の米作で三年連続特賞を受賞した大字十六面の農家の一文を紹介しよう。「大体米作技術というものは、日常我々の周辺にころがっている現象に対する合理的な考えであると思われまます。例えば、梅の花が上向きに咲いたら今年豊作だとよく老人が話され

るのを耳にします。私も百姓初めには、この言葉を何か神がかりのように受け取っておりました。梅の花と豊作と一体どんな関係があるんだろうか。私達はこれらのことを一笑に附することなく、総べての現象は事実であるから、事實は事實として尊重し、これに納得のいく科学的な説明を求める習慣が、技術を習得し得る最大の条件ではないでしょうか。そして篤農家技術を導入されることには異論はないが、これに科学的な検討を加えて、条件に応じた米作りをして戴きたいのであります。まわしの世界を担いながら毎日の農作業を行う篤農家の言葉である。

毎日、毎年の農作業を手際よくまわしていくために、天候予測に関する伝統的な知恵は、気のきいた農家なら誰でもが持っていた。自然のもとで耕し暮らす農家は、大きな「天のまわし」のもとで生きていたと言えよう。それを実感して農作業と結びつけたものが、数多の天候予測の知恵だった。まわしは、作り、手、世から天、宇宙までまわっていたのである⁽⁶¹⁾。しかも先の農家は、こうした伝統的な知恵を神がかり、非科学的と否定せず、事實は事實として受け容れ、経験を科学と融合させようと努力していた。これこそが在地農法が改良されていくうえで、一番の基底にある農家のスタンスであった。

残念ながら経験的な知恵、そしてこのような謙虚な態度は、地上の作り・手・世まわしの消滅、全天候対応型ハウスの発達により消えかけていた。カネは天下の回り物でもなくなっ

た。イチゴになってから年間就労の形となり、農繁期・農閑期のリズムがなくなり一年中追いまくられるようになった。しかしそれでも、「金木犀が咲いたら、イチゴの花芽が出来る」といった感覚はまだ残っていると言う⁽⁶²⁾。天のまわしはそう簡単に減びない。お天道さまは今日も元気だ。

しかし、編集後記に「農村不況が叫ばれ、現に私たちの友人が一人逃げ二人減りして、都会に吸い込まれつつある昨今、何かしら一抹の不安とさびしさと憤りを覚える」、と記しているのを見落とせない。高度経済成長期の昭和三〇年代、すでに脱農化、都市化がすすみはじめていることに対する不安、さびしさ、そして、憤りはどこに向けられていたのであろうか。まわしの軸となる村が崩れはじめていることを予感していたに違いない。

高校生たちの模索と不安

奈良県立田原本高校（後に田原本農高）には、盆地中央部の農家の子弟たちが通学していた。生徒たちは昭和三一（一九五六）年から自分たちの研究活動を『研究集録』としてまとめた⁽⁶³⁾。「唐古遺跡時代の生活を想像して」「平野村の環濠集落について」「大和民謡について」など地域に即したものがあつた。「胡瓜栽培と其の跡作水稻の改善」「水稻多収穫栽培の研究」「農薬ポルドウ液の薬効と適当な使用方法」など、農業関係の研究も数多くある。新しい農法の模索が高校生の間でもなされていたとは驚きである。

表5 農家戸数(専兼別)の推移

	奈良県				郡山農業改良普及所の管内				大和郡山市			
	総農家	専業	1種兼業	2種兼業	総農家	専業	1種兼業	2種兼業	総農家	専業	1種兼業	2種兼業
昭和35年 (1960)	65,801	16,977 (25.8)	19,411 (29.5)	29,413 (44.7)	8,411	3,822 (45.4)	2,240 (26.6)	2,349 (27.9)				
〃 40年 (1965)	61,574	10,652 (17.3)	16,317 (26.5)	34,605 (56.2)	7,425	1,505 (20.3)	2,316 (31.2)	3,614 (48.7)				
〃 45年 (1970)	57,600	7,200 (12.5)	13,133 (22.8)	37,267 (64.7)	7,072	1,483 (21.0)	1,883 (26.7)	3,706 (52.4)	2,659	675 (25.4)	682 (25.6)	1,302 (49.0)
〃 50年 (1975)	52,560	4,993 (9.5)	9,251 (17.6)	38,316 (72.9)	6,714	1,120 (16.7)	1,519 (22.6)	4,075 (60.7)	2,432	452 (19.3)	559 (23.9)	1,421 (60.8)
〃 55年 (1980)					6,084	753 (12.4)	995 (16.4)	4,336 (71.3)	2,349	336 (14.3)	531 (22.6)	1,482 (63.1)
	(80.8%)				(72.3%)							

*最下段は昭和53年

(注) 本文注65を参照, 筆者が作成

ところで、昭和三〇年代の農業に対する世間の風潮はどのようなものだったか。同校の高校生は「誤まれる農業観」と題して言う。「最近農作ブームが全国的に伝えられると共に一方に於ては就職問題が深刻な社会問題として取り上げられています。然るに、この問題に関する雑誌の対談に『お前が頭がにぶいから農業でもやれ』と云う記事を読み、農学徒である私は非常な不満を覚えたのであります。すべて農業は頭のない、あてすっぽにやる他に使い道のない人間のなす仕事でしようか。実に軽蔑的な態度がよくこの雑誌の中

に現れています。その上情けない事には、この考えが社会一般の常識となっており、又一方では次代を背負うべき農家の子弟が、農業は理論も考えないで、ただもくもくと働く割の合わない馬鹿のする仕事だと決め込んで卑下していることでもあります」。これが昭和三〇年代の世間の実相であった。

ちょうど、井上晴丸らによる同高校生の職業意識に関する昭和三五(一九六〇)年の調査があった。⁶⁴⁾三年生の回答数二四五のうち、自分の家の業を継ぐ一〇三(四二%)、他の職業につく五七(二三%)、農業関係の職業につく三四(十四%)、未定五一(二二%)となっている。

今後の農業経営のやり方について答えた二三四名のうち、酪農・養鶏・園芸などに重点を切りかえる一一五(四九%)、もっと機械化したり共同化したり経営のやり方を工夫する九四(四〇%)、経営面積を減らして兼業に出る二一(五%)、今のやり方をつづける三(一%)などとなっていた。農家のあと継ぎたちは、伝統的なまわしの世界から、新たな農業経営を模索していた。

農業をやるとの仮定で答えた二一九名の理由は、自分があとを継がなければ親が困るから七四(三四%)、農業が好きだから六五(三〇%)、農業は安定しているから二九(十三%)、先祖代々がずっと農業だから一九(九%)、親がやれというから十七(八%)などとなっている。

他の職業につくとの仮定で答えた一六八名の理由は、農業

は将来に希望がもてないから八六(五一%)、二、三男だから三一(十八%)、農業がきらいだから十四(八%)、農業なんかやるのはバカらしいから九(五%)、都会で暮らしたいから八(五%)などである。一方には農業に見切りをつけ、離農・離村しようとする若者たちがいた。

昭和三〇年代、高校生たちは農業に対する世間の蔑視、職業としての将来性がないことをちゃんと見抜いていた。高度経済成長は農業蔑視を加速させ、まわしの世界を解体させた。表5は、奈良県、大和郡山市の専兼別の農家戸数の推移を示したものである。⁶⁵各年の()内の数字は、専兼別の構成比率である。欄外の数字は、昭和三五年と比較しての総農家戸数の比率である。大和郡山市は全県と比べても農業が盛んな地域といえるが、専業農家が激減し、第二種兼業に移行していることがはっきりとわかる。昭和三〇年代の篤農家、高校生への心配、憤懣をよそに、その後の高度成長の進行のもとで、農村は兼業化、脱農化へと進んでいったのである。

おわりに

その後の一九七〇年代以降における展開は詳しく検討できていない。一九八〇年から二〇〇〇年くらいの大和郡山市治道の農家による「完熟トマト」による、ならこープ生協と産直については、別で紹介した。⁶⁶その中心メンバーであった堀内金義さんとは一九七〇年代後半よりお付き合いし、いろいろと現場の農業について教えていただいた。本稿も一九八〇

年代後半から一九九三年頃まで、一緒に農家を史料調査、聞き取りを行ったことがもとなつていいる。その後一九九三年四月からは堀内さんと一緒に、奈良県内の農業に関心ある方々と「やまと農談会」を月に一回開いてきた。二〇一一年四月まで一八年間続けた。

こうした検討の中で、奈良盆地中央部では一九四六年の農地改革後の転換、一九七〇年の減反と一九七四年のオイルショックでの転換、イチゴやトマトに病気が出るようになったことと有機農業の普及、そして一九九〇年前後からの輸入農産物の拡大による転換と、農業生産や農村にとって三回の転換期があったようである。本稿で検討したのは、第一の転換前後から、第二の転換前後までである。つまり、大和農法の伝統的な作りまわしが変容していく過程であった。

西欧モデルからの脱却

歴史の転換期には、「温故知新」というように歴史に立ち戻るのが王道である。戦後の転換期には、日本近代の農業史を検討しようということで、一九五〇年代に井上晴丸らにより農業発達史調査会が組織され、『日本農業発達史』全一〇巻、別巻二冊が刊行された。⁶⁷奈良県についても、山路健「大和平野における水田生産力の展開」で分析されている。幕末から戦前期までの農業生産と農村構造を分析し、農民的商品生産の自由な発展が輪作栽培のメカニズムとあいまって、上層・下層への分解が生じ、上昇した富農は流通過程を把握し

て農村の支配的地位を占めた。「戦後への示唆」として、今後栽培上の技術差がいよいよ大きくなり、富農層とそれ以外の「資本主義のকাশし出す農民の階層分解がヨリ鮮明な形となつて現れてくる」と、述べている⁶⁸。当時の農業理論は、西欧モデルによる農民層の両極分解による富農層を担い手とした資本主義的農業の発展という道筋が描かれていた。山路の論文もそれに沿っている。しかしその後の歴史的現実の推移は、それが誤りであつた事を示している。

なお、京大人文研の今西錦司のグループによつて、当時の盆地中央部の平野村（現田原本町）をフィールドワークした記録が残されている。文化人類学の米山俊直は、その調査後に今西グループに入り、生まれ故郷の奈良をはじめ日本の農山村をフィールドワークしている⁶⁹。

この『日本農業発達史』第九巻に、有名な加用信文の「日本農法の性格」が掲載された⁷⁰。西欧の作付方式を地力維持と雑草防除体系の視点から、三圃式↓穀草式↓輪栽式と歴史的発展方式を描いた。日本の作付方式を主穀式として、明治以降金肥の投入による外部からの地力補給がなされたとした。一九六五年には、欧米の稲作主産地ではこの五〇年来、水稲連作から例外なしに水稲と牧草との田畑輪換方式に変わつてきており、穀草式（輪換式）が採用されている。しかるに日本では一九六〇年の「農業基本法の制定当時には、このような田畑輪換方式が、今後の水田利用のあり方として強調されていたことは、まだ記憶に新たなところであるが、その後田

畑輪換が意外に延び悩んで、むしろ縮小の兆候すらみられる」。しかし、「地力消耗と雑草蔓延に対して、水田連作方式から田畑輪換方式への転換を必然化する」として、牧草との輪換方式、畜産部門と結合することを提唱した⁷¹。

保志恂は加用農法論を受け継いで、一九七八年に「田畑輪換、水田酪農方式の導入という日本的な技術革命と、集団的社会的経営への転換という生産構造変革があいつての、日本的な農民的な農業革命への展望」を語つた。一九九八、九年にも同様の主張を行っている⁷²。二〇一一年に梶井功は、田畑輪換による畑作導入、水田の汎用化が必要という。田代洋一は、柘植徳雄による加用批判を紹介しながらも、「確かに加用農法論もなお西欧規範の学問風土という時代環境の制約を免れないが、しかし田畑輪換の方向性に間違いはない」と断言する⁷³。

私自身も奈良県の農法史を実証的に研究し、守田志郎の主張を学ぶ中で、田畑輪換の有効性を主張してきた⁷⁴。しかし同じ主張ながら、加用農法論による西欧モデルからの田畑輪換方式の主張と、私の日本農法史の実証的な研究からの作りまわしの復興とは、根底の発想が違つていのように思えるのである。歴史的現実に基づく帰納的方法による日本モデルは可能か、重要な課題であるので今後さらに検討していきたい。なお、戦後すぐに水田酪農の必要性を主張したのは桜井豊であり、昭和二〇年代に日本の輪作体系を具体的に調査研究したのは沢村東平である⁷⁶。

「農学ハ舌耕ニアラザルナリ」、「心耕デアル」

戦前から戦後にかけて技術論論争があつたが、私の言う狭義の農法Ⅱ農業技術体系Ⅱ農術に関して、大谷省三の「技術とは、人間の環境把握における実践的方法である」が納得できると書いた。⁽⁷⁷⁾ まだ正直ピンとは来てなかつたのだが、彼の自叙伝『私の歩んできた道』に、その具体的説明があつた。

「人間が生きたるための実践のなかから、主観的な経験則にもとづいて技能が生まれてくる。その経験則の積み重ねと広がりのおかげで、こうすればこうなるという因果関係が法則としてつかまれるようになると、技術といつていい。さらにその論理が科学的に説明され、技術が科学に依拠できるようになれば、近代技術の段階に到達したといふことができる」。そして、私、大谷は労働手段の体系説ではもちろんないが、世間では大谷を武谷三男の「技術とは客観的自然法則の意識的適用」説だと評価している。しかし、科学は基本的に技術を母体にして発展してきていると考えていて、武谷説では私の考えは包摂されないと、はつきり述べている。⁽⁷⁸⁾

私は、この説明で納得した。(農家の) 実践↓経験則↓技能↓因果関係↓法則↓技術(農術) ↓論理↓科学(農学)、そしていったん科学が成立すれば、反対の方向で実践にも応用されていく。また、科学と実践との同時的な絡み合いも生まれる。これが実学としての農学のあり方かと思う。あくまで農家の経験知、歴史的な伝承知がベースにあるということだ。

たまたま平成四(一九九二)年八月に治道農協で、さる有名な先生の講演会があり、堀内さんらとお聞きした。内容はさておいて、いくつか気になったことを当時のメモから記しておく。「私は農家の出身だ。だから農家の気持ちがよくわかる」(卑下・厚顔)。「アメリカのウイスコンシンの農家は、すばらしい。それにひきかえ、日本の農家はダメだ」(洋魂・愚民)。「私は農水省に提言して、様々な政策を実現した。これから私が新しいリーダーとなって農村を指導していく」(尊大・傲慢)と、弁舌さわやかに話された。

斎藤萬吉(一八六三〜一九一四)という農学者がいる。駒場農学校を卒業し、明治中期から大正中ごろまで農科大学実科の助教授、国立農事試験場の技師を務めながら、全国一二〇の農家を定点的に六度にわたり調査し、名著『日本農業の経済的変遷』を著した。シャツポはかぶらず着古した洋服に草鞋・脚絆姿で、農家と話し込んだ。彼が常日頃言っていたのは、死後碑文に書かれた、「農学ハ舌耕ニアラザルナリ」であつた。⁽⁷⁹⁾ 実学である農学を担う農学者は、「口舌の徒」であつてならないと言うのが、斎藤萬吉の信念であつた。私は自著で述べた「心土不二」をもじって、「農学ハ心耕デアル」と言いたい。すべては現場の農家から始まるのである。シャツポ虫の頭と舌からではない。

川口由一の「自然農」

最後に補足的に一つ紹介して終わりにしたい。平成四(一

九九二一年五月七日、桜井市辻に「自然農」で有名な川口由一さんをお訪ねした。堀内さんの母方が親戚ということで、気楽にお会いしていただけた。その時の感想をフィールドノートから紹介する。

化学肥料と農薬により、自分の体を悪くしたことから、昭和五三（一九七八）年より自然農を始めた。不耕起、無肥料、無農薬、雑草を主に肥料としてやる。収量はほかと比べれば、六、七割というところ。それ以上収穫しようとする、施肥、深耕、除草という技術が生まれてくる。家族の自給くらいだったら、これで十分できる。国民全体の食糧自給なんて考えだすと無理が生じるので、ゲリラ的にこうしてやっていくのが自分にはちよど合っている。近くの農家は誰もまねしようとしな。見学者や自然農塾の参加者は、みんな都会の人間ばかりである。

正直言つて驚いた。ショック!!!これまで私は本稿で述べたように大和農法をソラマメを軸とした作りまわしによりながら、八基盤整備↓多肥↓深耕Vという順でスパイラル的に収量を増大させてきたと捉えてきた。どういうことだ。すべて否定されるではないか。私はこうした自然農法的なものは、何となく胡散臭く感じて、敬して遠ざけてきたのだ。

平成三（一九九一）年当時の大和郡山市内では、MOA（世界救世教）農法が信者となった農家で昭和四八（一九七三）年頃から始まり、親戚筋を通して五名が行っていた。⁸⁰また、大字を越えて一九六五年頃より「高度園芸研究会」とい

う民間の組織があったそう。これは東京から講師を呼んだりしながら、イチゴの苗の根を張らす土づくりを重視し、化学肥料は活着程度にしか使わないという考え方で、有機農業の先駆けと言ってもよかつた。⁸¹川口さんも含め、こうした在りからの動きがあつたことは注目されてよい。

一九九一年七月五日、今度はトマトの産直をしているならコープの消費者の方々と再び訪ねた。約百名もの参加があり、関心の強さを思い知らされた。田植えしたばかりの田を見せてもらおう。雑草のなかでちよろちよろつと、二本植えの苗があり、苗が小さい頃は回りの草に負けないように除草してやる。籾殻や鶏糞、菜種粕など、自然界で出来たものをやることはある。苗代の時は、少し掘り取つて籾を播く。でないところの草に負けてしまうので。そういう点では、栽培を是としていと言われた。何が何でも自然任せというわけではないのである。

何せ力を抜いて、無理しないでやっつていこうというのだ。土にとらわれだした時から、農の苦しみが始まった。命の亡がらを重ねていけば、それで十分にやっつていける。分析の世界には立ち入らない。作物の相性といったこともとくに考えない。ある時には良くても、別の時には悪くなることもあるのだ。

その後、川口さんの出たばかりの本『妙なる畑に立ちて』（一九九〇 野草社）などを読み、三重県の赤目自然農塾へも平成九（一九九七）年一〇月一二日に堀内さんらと訪ねて

みた。『自然農にいのち宿りて』(二〇一四 創森社)では、自然農の三大原則として、「耕さない―過去のいのちたちの舞台で今のいのちたちが生きることと約束されている」、「肥料、農薬を必要としない―持ち込まず、持ち出さず」、「草や虫を敵としない―害虫益虫、有効無効の別なき自然界」をあげており、巻末によれば六〇以上の自然農塾が全国で行われている。

再びその時の記憶が強烈にフラッシュバックしたのは、最近になって岩澤信夫の『究極の田んぼ―耕さず肥料も農薬も使わない農業―』(二〇一〇 日本経済新聞社)を読んだからである。⁽⁸²⁾ 冬季湛水・不耕起移植栽培による自然耕塾は、千葉県神崎町はじめ、他に全国六箇所で実践されている。⁽⁸³⁾ 私は「天然農法↓人工農法↓天工農法」と日本農法史の見取り図を描いたが、⁽⁸⁴⁾ 川口の自然農や岩澤の不耕起栽培は、反・人工農法なのか、それとも新しい天工農法なのだろうか？ 一方でAIなどによるスマート農業も広がってきている。また加用農法論が、守田志郎が、そして私も言ってきた田畑輪換方式が日本において現実に今後展開できるのだろうか？

本稿で紹介したのは、奈良盆地中央部において「まわし(循環)・ならし(平準)・合わせ(和合)」の伝統的な日本農法が、「まわさず(効率)・ならさず(競争)・合わさず(対立)」の脱・日本農法へ変容していく過程であった。⁽⁸⁵⁾

私は正直言って戸惑っている。情けないが、再びゆっくり

歩きながら考えているところである。

注記

- (1) 奈良県農業協同組合中央会編『奈良県における農畜産物の作付面積・生産量の推移』一、二頁 一九八一
- (2) 農林省農務局編纂『雑穀豆類甘藷馬鈴薯耕種要綱』一九三七
- (3) 農林省農務局編纂『水稻及陸稻耕種要綱』一九三六
- (4) 農林省農務局編纂『麦類耕種要綱』一九三七
- (5) 徳永『日本農法史研究』五八頁 一九九七 農文協
- (6) 帝国農会『農業経営成績調査報告第五輯 耕地利用に関する調査』三四～三七頁より、なお、同『自大正一三年至昭和八年 最近十ヶ年に於ける農業経営の変遷』(第二輯)、奈良県農会『農業経営改善十三ヶ年間の実績』一九三八を参照
- (7) 萩原善太郎『大和西瓜の栽培と実際』一九二七 萩原農事事務所、同『大和西瓜の栽培法』一九二九 富民協会、東出精一・松原一夫編『作物に魂を打込めて…精農萩原善太郎氏の信念を語る』一九三二 明文堂などを参照。一九九一年二月一日・田原本町法貴寺・前西英雄氏(昭和三年生)より、一九九一年一〇月一日・中城・堀内嘉博氏(大正五年生)より聞き取り。なお聞き取りの大字名のみは、すべて大和郡山市
- (8) 沢村東平・井上実編『田畑輪換の経営構造』一九六〇 農林水産業生産性向上会議、斎藤光夫『田畑輪換栽培』一九六二 農文協、鈴木栄次郎『大和スイカ全編』一九七一 富民協会など
- (9) 前掲注8の『田畑輪換の経営構造』一四八頁

- (10) 農業生産調査会『奈良県の営農類型別・階層別にみた技術体系』二〇六頁 一九六〇
- (11) 西村博行「田畑輪換栽培方式による土地と水の利用」一
二頁 西村博行代表研究者『琵琶湖周辺地域における土地
と水の利用に関する経済的研究』一九八二 科研報告書
- (12) 田原本町法貴寺・前西英雄家文書「農家日記」など
- (13) 一九九一年八月二日・横田・橋下忠一郎氏より聞き取り
- (14) 大和郡山市中城町・A家文書「萬野作覚帳」「生産高帳」
- (15) 大和郡山市新庄町・森田実家文書「明治大正昭和平成
農作物農機具 控」
- (16) 『奈良県統計書』より
前掲注3
- (17) 前掲注3
- (18) 前掲注4
- (19) 帝国農会『農作業慣行調査』四九二頁 一九四一
- (20) 『奈良県農会報』第二七三号 一三二―一三三頁 一九三六
- (21) 帝国農会による綿谷赴夫の調査ノートより。本ノートに
関しては、一九八〇年代後半に当時奈良県農業試験場にい
た宮本誠氏よりコピーを頂いた。一九九〇年頃に故磯辺俊
彦氏に使用の許可を電話で頂いた。記して両氏に感謝する。
なお、帝国農会時代の綿谷氏については、『綿谷赴夫著作
集』第二卷(一九七九 農林統計協会)の月報「私の履歴
書(その二)」を参照
- (22) 一九九一年五月一日・白土・東口鶴治氏(明治三八年
生)より、同日・横田・新谷一雄氏(明治四一年生)より、
同年五月二〇日・樺枝・西田耕治氏(明治三七年生)より、
同年七月八日・番条・鮎井武雄氏(明治四〇年生)などよ
り聞き取り
- (23) 近畿六府県連絡経済委員会『近郊農村経済事情調査第一
〇輯・地黄部落経済事情調査』一九三九
- (24) 田原本町法貴寺・市川正昭家文書『秋季農繁期農村労力
調整基本調査』一九三九
- (25) 奈良県『夏季農業の実態』一二頁 一九五二
- (26) 前掲注10 附表より
- (27) 前掲注25 一二頁
- (28) 田原本町秦庄・松井帰一家文書「耕作日誌」、田原本町
阿部田・松井淳一家文書「明治大正社会記」、田原本町東
但馬・高井利美家文書、田原本町宮古・石橋源内家文書
「農作勘定帳」
- (29) 前掲注15
- (30) 伊藤喜雄『農業の技術と経営』一九七九 家の光協会、
稲本志良『農業の技術進歩と家族経営』一九八七 大明堂
- (31) 一九九一年六月二四日・石川・村井多賀治氏(大正七年
生)より聞き取り
- (32) 一九九一年七月一七日・新庄・森田実氏(明治四一年生)
より聞き取り
- (33) 一九九二年七月三十一日・横田・池田清栄さんより聞き取
り
- (34) 一九九一年九月一日・新庄・辻村シズエさん(大正元
年生)より聞き取り
- (35) 前掲注7の前西英雄氏より聞き取り
- (36) 守田志郎『小農はなぜ強いのか』一九七五 農文協(人間
選書版 二〇〇二)
- (37) 徳永『日本農法の心土』七七頁 二〇一九 農文協
- (38) 『日本農書全集』第二八卷一八六、二二二頁 一九八二
農文協
- (39) 越智太兵衛傳編纂委員会『越智太兵衛傳』一九七一

- (40) 前掲注38 一二五頁
- (41) 前掲注35
- (42) 大和郡山市石川町・藪内源弘家文書
- (43) 一九九二年一月二日・伊豆七条・南本強嗣氏より聞き取り
- (44) 前掲注13
- (45) 『第十回表彰記念 米作日本一表彰受賞者の稲作技術』一九五九 奈良県、橋下氏は昭和二六、三〇年度に入賞している。
- (46) 大和郡山市横田町・橋下忠一郎家文書「昭和三九年度初肥料設計」など
- (47) 前掲注12前西家文書 川東村営農相談所『営農』別冊「川東稲配合肥料に依る稲作増収安定栽培法」一九五八 田原本町川東村農業協同組合
- (48) 4日クラブ三〇周年記念誌『ともだち』一九八四
- (49) 大和郡山市イチゴ研究会『郡山イチゴ』増刊号 一九七一
- (50) 『奈良県農業大学創立二五周年記念 豊農会六〇年の歩み』一九九五 奈良県農業大学校豊農会
- (51) 奈良県農業試験場向陵会『サイエンス』第三号 二頁 一九五四
- (52) 一九九一年八月二日・辻中平治氏より聞き取り、前掲注31
- (53) 徳永『日本農法史研究』二五九〜二六〇頁
- (54) 前掲注31 前掲注22の櫟枝・西田耕治氏より聞き取り
- (55) 一九九一年一月二日・横田・川本謙氏より聞き取り
- (56) 一九九二年七月一三日・発志院・向井俊彦氏より聞き取り
- (57) 一九九二年九月三日・番条・堀内當司氏より聞き取り
- (58) 前掲注33、一九九二年七月三十一日・横田・藤川千代子さん、同日・横田・米沢靖子さん、一九九二年八月六日・横田・藤川千代栄さんより聞き取り
- (59) 一九九二年四月二四日・新庄・奥修氏(当時三三歳)より聞き取り
- (60) 前掲注12前西家文書 田原本町農業研究会『土』創刊号 一五〜一六頁 一九六一
- (61) 徳永『日本農法の天道』第一章 二〇〇〇 農文協
- (62) 一九九一年九月二日・白土・北田氏より聞き取り
- (63) 前掲注12前西家文書 田原本高校『研究集録』第一号 七〇頁 一九五六
- (64) 農業構造問題研究会編(井上晴丸他)『日本経済の二重構造と農業発展に関する研究』一〇三〜一三四頁 一九六
- (65) 『奈良県における農業経営と農家の就業構造に関する調査結果』一頁 一九七八 奈良県農業会義、事業三〇周年記念誌『伸びゆく大和の農業』三五頁 一九七八 奈良県、なお郡山農業普及所の管内は、大和郡山市・生駒市・平群町・三郷町・斑鳩町・安堵村である。『大和郡山市農業基本計画』一六頁 一九八四 大和郡山市
- (66) 徳永『日本農法の天道』一五八〜一六九頁 同『日本農法の心土』六九〜七一頁
- (67) 農業発達史調査会編『日本農業発達史』全一〇巻、別巻上下 一九五三〜五八 中央公論社
- (68) 前掲注67 別巻上 ただし改訂版による。一九三〜二六六頁 一九七八 中央公論社
- (69) 今西錦司『村と人間』一九五二 新評論社、米山俊直

- 『日本のむらの百年』第二章Ⅲ 一九六七 日本放送出版協会、同『過疎社会』一九六九 日本放送出版協会、同『小盆地宇宙と日本文化』一九八九 岩波書店、これらは、『米山俊直の仕事』全二冊 二〇〇六 二〇〇八 人文書館 にまとめられている。
- (70) 前掲注67 第九卷 ただし改訂版による。六〇七～六五七頁 一九七八 中央公論社、加用信文『日本農法論』所収 一九七二 御茶の水書房
- (71) 前掲注70 加用『日本農法論』一九二、二六三頁
保志恂『日本農業構造の課題』三六八頁(一九七八執筆)
一九八一 御茶の水書房、同『現代農業問題論究』第四章(一九九八執筆)、第八章(一九九八執筆) 二〇〇〇 御茶の水書房
- (72) 梶井功編著『「農」を論ず』九二、四〇頁 二〇一一年 農林統計協会
- (73) 徳永『日本農法史研究』二九九～三〇〇頁
- (74) 徳永『日本農法史研究』二九九～三〇〇頁
- (75) 桜井豊『水田輪作と水田酪農』一九四八 八雲書店、なお『農業生産力論 水田酪農論』二〇〇五 筑波書房で復刻
- (76) 沢村東平「日本における輪作の系譜(1)(2)」(『農業及園芸』第二五卷七・八号 一九五〇)、同「水田農業の作付方式に関する研究」一九五七 『農業技術研究所報告』H二〇号、他に同三号(一九五二)、同七号(一九五三)、同一五号(一九五五)。私は沢村東平ら戦後において作付方式を先駆的に研究したグループを、戦前に朝鮮農試の高橋昇の指導を受けた者として「朝鮮農試グループ」と名づけた(徳永『日本農法の天道』二〇六～二〇八頁)。
- (77) 徳永『日本農法の心土』四六～四七頁、大谷省三『自作農論・技術論』二四八頁(一九四六執筆) 一九七三 農文協
- (78) 大谷省三『私の歩んできた道』一四六～一四七頁 一九七九 大谷省三先生の古稀を祝う会
- (79) 斎藤萬吉『日本農業の経済的変遷』他(『明治大正農政経済名著集』第九卷 一九七六 農文協)、碑文の全文は、同巻月報の西山武一により紹介されている。なお、西尾敏彦『「農字ハ舌耕ニアラザルナリ」斎藤萬吉の農村行脚』ある農業研究者の生きざま(二〇一八 『農業研究』第三一号)を参照
- (80) 一九九一年一月一日・石川・戸田鏡治氏(大正二二年生)、前掲注55
- (81) 一九九二年五月一九日・発志院・喜多文雄氏(当時六八歳)より聞き取り
- (82) 徳永『日本農法の心土』六五～六九頁
- (83) 二〇一九年七月一日確認の「日本不耕起栽培普及会」のホームページより
- (84) 徳永『日本農法の心土』一一七～一一八頁
- (85) 徳永『日本農法の心土』一一六頁